

■論文題目	住民減少が続くニュータウンの取り組みと在り方に関する研究 —群馬県高崎市内のニュータウンを事例として—		
■氏名(学籍番号)	剣 新太郎(0412023307)		
■指導教員	吉野 英岐	■所属コース	地域社会・環境コース
■キーワード	ニュータウン	コミュニティ	定常型社会

1. 研究の背景と目的

昨今、急激な人口減少により、全国各地で過疎化が問題視され、様々な対策や取り組みが行われてきた。中でも今から40~50年前に過密化対策として郊外に多く造られたニュータウンでは、人口減少と高齢化に伴う様々な問題が発生しているほか、住宅施設の老朽化や陳腐化も顕著化しており、地域の活力の低下など持続性が問われている。対策として、新たな居住者の呼び込みや経済活動の持続などが主流の中、「定常型社会」といった、経済成長を絶対的な目標とせず十分な豊かさを実現させていくという考えや、「well being」といった、個人の幸福を第一に置く考えなど、現在住んでいる住民の生活の充実に重きを置いた取り組みが少しずつ広まりを見せている。

本研究では、実際に住民減少が続いているニュータウンの住民に対して、地域活動の存続や住民間でのコミュニティ形成の意義を聞き出し、実態を明らかにすることで、住民減少が続くニュータウンの在り方についての考察を行い、同じように住民減少が続くニュータウンの問題解決に寄与することを目的とする。

2. 調査対象の概要と方法

住民減少が続くニュータウンの研究として、室田(2018)は、地域マネジメント組織は持続性が重要であり、資金的な安定性が必要であるとした。また、伊藤ら(2016)は、子育て環境の充実とそのPRに力を入れるべきとした。しかし、これらの研究では、実際の住民の声に基づいた研究はなされておらず、ほとんどが統計から得られたデータのみで、住民目線でのニュータウンでの地域活動を存続させる理由やコミュニティの存在意義についての考えは明らかになっていない。

本研究では、群馬県高崎市内にあるニュータウンである城山地区を調査対象地とした。本地域は、42年前に丘陵地を開拓してできたニュータウンであり、1989年に最大3021人いた住民が2022年には1473人まで減少している。本地域は、市内でも住民のコミュニティ活動が活発であるとして注目されている一方で、地域活動のほとんどが高齢者で構成され、地域のイベントや行事の存続が危ぶまれている地域でもある。

城山地区では、「城山町の2030年を考える会」が発足しており、その会が実施したヒアリング調査で大宮ら(2020)は、地域住民が緩やかな関係性を保ち、豊かな交流を楽しむコミュニティの成熟の必要性や行事の意義の確認、地域全体で課題を共有し取り込むことの重要性を説いている。だが、問題点についての考察にとどまっており、住民の地域活動に対する考えやコミュニティの存在意義について触れられることはなかった。そこで、本研究では、「城山町の2030年を考える会」の代表の大宮氏の助力のもと、地域活動に参加している三人と、「城山地区地域づくり活動協議会」、「城山公民館」、「城山婦人会」、「城山小学習ボランティア」の四つの団体に対して、2024年11月5日から12月6日の期間で聞き取り調査を実施し、城山地区の行事や地域活動をする理由と存続、コミュニティの意義、ニュータウンにおける問題点や課題、今後の展望などを聞き、住民減少が続くニュータウンの在り方に対する住民の考えを明らかにした。

3. 調査結果と分析

調査を行った城山地区の団体や地域行事に参加する人達は、住民減少が続いている現在の状況に対して、強い危機感を持ち、行事の規模の縮小や地域活動が少なくなることで、コミュニケーションの機会が失われるのではないかという考えを共通して認識していた。

城山地区地域づくり活動協議会では、コミュニティの観点からの行事や地域活動は、地域内でのつながり

を形成するために大切であるとし、行事を存続させるために、会議の数の減少や、夏祭りでは暑さを避けるために夕方からの開催や大がかりなステージの設営をやめるなど体力とメンバーの年齢層に合わせた改善や、若い人を企画に取り入れるなどして工夫を凝らしていた。地域活動や行事を執り行っている大半は高齢者で若い人が少なく、若い人に来てほしいと考えているが、来てくれた人をうまく巻き込む方法がわからないこと、若い人も高齢者ばかりでギャップを感じて入りづらいことが課題であった。

一方で、地域活動や行事は住民同士のコミュニケーションの場として機能や活動の持続に貢献しており、城山小学習ボランティアでは、高齢者が子どもに教えるという作業をすることは、高齢者にとっても子どもにとっても、ここまで年が離れた人と会話する機会は少ないため、互いにとって良い刺激になり高齢者にとっての生きがいや健康につながっていると述べていた。夏祭りなどの行事も、住民たちがやりがいを持てる場所として大きく、かつての住民が戻る機会の創出にも役立っていた。

コミュニティの意義としては、近所などの住民間である程度コミュニティがないと、防災などの面でもしもの時に対応しづらいのではないかという問題と、町内での出来事の情報を受け取る機会が少なくなることから、多少でもつながりは住民間で持つべきという考えを複数の団体が持っていた。

4. 結論

調査の結果から住民減少が続くニュータウンの在り方を考えるにあたり、「人とのつながり」、「地域住民の活動の場」、「情報交換をする機会」が大切であることが明らかになった。地域活動や行事は住民間でのコミュニティとしての機能とやりがいとしての場、情報交換の場として城山地区では必要不可欠なものになっている。そのような機会の創出と持続のためには、地域活動と行事の大半を高齢者が担っており、若い人が少ない状況を変える必要がある。城山地区では、約 40 年前に引っ越してきた方たちが、70 歳を超えても元気で活発な人が多く、城山地区の様々な行事や活動を運営できているという形だが、次の世代の地域に貢献したいという方が極端に少なく、育っていない。そのうえで若い人の意見を取り入れるためにも祭りなどの企画に若い人が入ってもらえるなどの工夫は、今後、次の世代へ引き継ぐためには重要な一歩である。

ニュータウンの根本的な問題として、世代が固まっていること、歴史が浅いことが挙げられる。できて 40 年、50 年のニュータウンは、地域活動や行事を執り行う大半が 70 歳以上の人になっており、若い人に引き継いできた経験や歴史がなく、若い人は、高齢者が固まっていることで、自分たちが入る余地はないと考えてしまっている現状が、次の世代がニュータウンの地域活動や行事に参加しない要因になってしまっている。

地域活動や行事に次の世代の人を取り入れる方法については、若い人が目につきやすいような SNS などを使った情報の発信や、高校生や大学生、子育て世代など若い人をターゲットとした地域の活動やイベントの企画を行い、若い人たちが参加しやすいような状況を作ること、ほかの地域活動などにも参入しやすくなるのではないかと。また、若い人に行事の存続が危機に陥っている現状と若い人の参入を望んでいるということとを直接伝える機会が必要である。

主な参考文献

伊藤亜都子・高橋美佐 2016 「神戸市におけるニュータウンの高齢化と地域コミュニティの現状 ―須磨ニュータウンを事例として―」『地域政策研究』 第 18 巻 第 2・3 合併号 p.85-86

城山町の 2030 年を考える会 2020 『城山町ヒアリング調査報告書』

室田昌子 2018 「持続型都市に向けたニュータウンの再生を考える」『都市住宅学』102 号（特集 持続型都市に向けたニュータウンの再生） p.10-11